

二〇二四年一〇月二日

しもた屋の細き露地より弓張月
朝寒や掬す手水のほのぬくし
秋さやか牧に散らばる放牧馬
鯉跳ねて映る水面の天高し
燈火親し遺句集読みて汝れ偲ぶ
ひと揺れに進むゴンドラ秋気澄む
墓山を埋め尽くさんと曼珠沙華

二〇二四年一〇月一日

雲海を抽んでて見ゆ富士山遙か
苑の萩愛づ短冊のホ匂もまた
爽涼や海風届く天守閣

二〇二四年一〇月九日

明日香路の畦といふ畦彼岸花
神宮の玉砂利踏めば音さやか
長き夜の思考迷走してやまず
茹でたての枝豆つまむ厨妻
ハングライダー風の翼のごと撓む
深秋や生家を守り独り住む
参道のいつしか濡れて萩の雨

二〇二四年一〇月八日

残る虫かつてたばこ屋ありし辻
千年を湧き継ぐ水の澄みまさり
庭涼し作務衣の僧の京言葉
碑に防人歌や萩の声
桐下駄の軽き音して秋湯治
曼珠沙華焼杉塀の裾綴る

二〇二四年一〇月七日

萩こぼる宮名水に口漱ぐ
松手入れ終へて梢に透く美空
露地さやか亀甲竹の塀つづく
鯛焼きの小豆は地産朝の市

二〇二四年一〇月六日

棋士はいま思案投首秋扇
諸鳥の零れ落ちくる刈田かな
二〇二四年一〇月五日
肩こりを忘れ一途に栗を剥く
豊秋の青海波なす畔を行く

毎日句会みのる選・二〇二四年一〇月二三日